

自己基準と他者基準（鈴木孝夫）①

雨上がりの空に、美しい虹がかかるのを見たことがない人はまずいないでしょう。ところで虹には幾つ色があるのか知っていますか。もちろん七ですね。あなた方の中には、赤橙黄緑青藍紫と色の順序まで覚えている人もあるかと思えます。

さて外国の虹はどうでしょう。近ごろは海外旅行が盛んですから、パリやハワイで異国の虹を見たという方もあると思いますが、幾つ色がありましたか。恐らく皆さんの答えは、ばかばかしい、自然現象だもの、どこだって七に決まってるじゃないか、でしょう。

ところがそうではないのです。例えばドイツ人にきいてみてください。五色だと言います。

イギリス人やアメリカ人のような英語を使う人々は、六と言う人が多いと思えます。でも七だと言う人もなくはありません。中には知らないとか、数えたことがないとか、いや無限じゃないのかなどと答える人もいます。トルコ人やポーランド人にきいてみますと、ほとんどの人がよく知らないと言います。ところがフランスの人は日本人と同じくだれにきいても、即座に七つと返事します。これはどうしたことでしょうか。

虹は空中の水滴が太陽の光線に対してプリズムのほたらきをして、太陽光線をそれぞれ異なった波長の光に分解してできた色彩の帯（輪）です。そこには人間の肉眼で見える波長の最も長い赤の光から、反対に最も短い紫まで、異なる波長の光（色）がずうっと切れ目なく連続しているのですから、本当は色の数を七とか五とか数えることができないものなのです。それを特定の数に区切って、虹には色が七つある、いや五つあるというぐあいに言うのは、見る人々の使う言語の習慣、つまり特定の文化によって決定される解釈にすぎないのです。日本では虹は昔から七色と決まっております、親子代々この知識が伝わり、そのことが絵本や辞書にも示されているために、日本人ならばいつの間にか虹は七色だと覚え、しかもそれが客観的な事実だと思ひ込むようになるのです。

私たち人間をめぐる事実の世界を、それぞれ違った文化に属する人が、異なったぐあいに見たり扱ったりしてしまうもう一つの例として蝶の話をしみましょう。

日本語で蝶と蛾は互いにはつきりと区別されています。蝶は昼間、花から花へとヒラヒラ飛び回り、蛾は

夜になると電灯に集まってきました。もちろんどちらも羽に粉（鱗粉）がついているとか、口が伸縮自在の管になっているなど似ている点もたくさんありますがいちおう、蝶と蛾は別物です。英語でも蝶はバタフライで蛾はモスと別の名前がついています。しかしフランス語ではこの蝶と蛾を区別しません。どちらもパピヨンと言います。その証拠にフランスの百科事典でパピヨンのところを見ますと、一枚の図版の中に蝶も蛾も順序不同、こちゃまぜに出てくるのです。このことは私も友人のフランス語学者松原秀一氏から教えられて気がついたことです。英語の事典の場合は、日本語のそれと同じく、蝶と蛾は左右か上下に分けて、蝶は蝶、蛾は蛾でまとめて絵が出ています。

もちろんフランスでも昆虫学者が科学的に虫を扱う時は、日本やイギリスの学者と全く同じ基準で、蝶の仲間と蛾のたぐいを区別しますが、一般の人の常識的なレベルでは、どちらも同じグループの昆虫として考えられているのです。

英語は蝶と蛾を区別する点では日本語と同じですがいつも同じというわけではありません。例えば日本語でトカゲと言えば夏に石の間を走り回る、青くて細長い爬虫類のことで、ヤモリと言えば夜に街灯などにへばりついて虫を食べる灰色の気味悪いやつを指します。ところが英語では、どちらもトカゲの仲間に入れられてしまいい、ともにリザードと呼ばれます。

私がこのような例で言いたいことは、日本人ならばだれでもいちおう別だと思っている、したがって別の扱い方、違った名前を与えている対象（もの）が、世界のどこでも同じように区別されるわけではないということです。人間がものを見る見方、ものに接する態度というものは、多分にその人が生まれた風土や文化、特に言語に左右されることを示したかったのです。

このように単語一つを取ってみても、私たちが平素無意識に使っている言葉というものは、ただ単に人間によって、道具としておとなしく使われているだけではなく、使い手である人間の認識や思考にも大きな影響力を持つものだということが理解できたと思えますが、それでは次に、そのような性質を持つ言葉が人がいつどこで、どのように使うかの点でも、異なった民族や文化の間では非常な違いがあることをお話ししましょう。

先日私がある本でスコットランドの民話小咄を読んでいたところ、その中に次のようなおもしろい話を見つけました。

スコットランド見物に来ていた一人のアメリカ人に向かって、ホテルのバーで隣に座ったスコットランド人が尋ねたのです。

ス「あんたどつから来たかね。」

ア「世界でいちばん大きい国からさ。」

ス「そんなら、あんたおれの国の人か。でもあんたの話し方にヤスコットランドなまりがないね。」

ただでさえ小さいイギリスの島の、それも北の隅の一部分にすぎず、しかも何百年も前にイギリス人に征服されて今は独立国でさえもないスコットランドの人々は、いまだに自分たちがイギリス人とはできが違うことを、ことごとくに主張し、公平な第三者の目には空いばりとしか見えぬ強がりと言うので有名です。

この小咄はそのような滑稽さを突いた一つですが、私がこの話を引き合いに出したわけは、スコットランド人をよく知っている欧米の人々は、この話を聞くとさもありませんと大笑いするからこそ小咄になることを注意していただきたいからです。自分の国が小さく力もないのに、それが世界でいちばん大きくりっぱな国だと思い、しかもそのことを平然と口に出す民族は、実はスコットランドに限らず世界にたくさんあるのです。

もう数年前のことになりますが、京都大学がヨーロッパを調査するために何人かの学者を、欧州各地に派遣したことがありました。その一人がフランスの西北部のブルターニュ地方を訪れ、とある村の酒場に入って、この地方の歴史や伝統、そして言語などに詳しい人はいないだろうかと、隣にいた男にきいたのです。このブルターニュは同じフランスでも、かつてフランス人に征服されたケルト系の民族がいまだに住んでいる地方で、経済的

な中央の繁栄からは見放された辺鄙な所です。言葉も以前はブルトン語という、別なものを使っていたのです。

さて京大の先生に相談を持ちかけられたくさんの男は、ポンと先生の肩をたたいて、「あんたは運がいい。あんたの探している人はこのおれだよ。おれがこの地方のことはいちばん詳しいんだ。そこいらにいるやつらはだめさ。」と言ったものです。京大の先生は大喜びでいろいろと質問して別れましたが、次の日に別の所で同じ質問を他の男に向けてみると、驚いたことにその男も、前日の酒場の男と全く同じ反応を示すではありませんか。なんのことはない、この地方の男はだれもが自分こそブルターニュのいちばん正統な代表人物だと自負していたというわけです。

日本人から見ると、米中ソのような超大国の国民が、自分たちの国は世界でいちばん大きい、強いぞと言うのなら、まだ分かります。また年とつた村長さんでもあるならば、おれをおいてほかに詳しいいやつなんかいないよと言つてもあまり不思議に聞こえません。ところが小さな国や境界の地に住むごく平凡な人の口から、そんなことを聞くととは想像もできないことです。

どうしてそうなのかの理由を簡単に言いますと、ユーラシア大陸の諸民族は程度の差こそあれ、どこの国の人も、自分の国がいちばんいい大きいと思つて居るのです。現実の客観的な大きさや強さで話をして居るのではなくて、自分の国、いやひいては自分自身が世界の中心だと思つて居るのです。つまり人が生きていくための価値体系の中心に自分を、自分の国をおくという自己中心的な考え方がどこでもふつうなのです。そのような主観的な自己評価と客観的な事実との間にズレがある時、人はそれを小咄に作つて笑うことになるのです。大切なことはどこの国のだれもがそう思つて居るという事実があるという点です。

自己基準と他者基準（鈴木孝夫）③

日本人ならどうでしょうか。例えば外国から客が来て、典型的な日本人に会いたい、代表的な日本の家を見学したいなどと言った時、私の家に来なさい、よそを見る必要なんかありませんよ、私と話をすればほかのだれとも会う必要はありませんよなどと言う人があるでしょうか。私はむしろ逆だと思えます。たいていの人はしりごみして、私の家なんか狭くて汚くて、だいいち日本間なんでありやしないし、というようなことで、結局有名な日本料理屋か何かに案内して、これが典型的な日本の家ですとか、お茶を濁すしまつになるのがオチでしょう。私こそ日本を代表する日本人であると平気で言う人もいないのではないのでしょうか。

日本人が自分の国である日本に対する態度もユーラシアの人々とは反対です。国土は狭いし資源はなし、生活程度もまだまだ、福祉は不充分といったぐあいに欠点を並べるのは上手でも、日本は世界でいちばんよい国です、こんなすばらしい住みやすい国はありませんなどと外国人に向かって素面で言う人がいるのでしょうか。

要するに日本人は価値の基準を自分自身におかず、他者にそれを求めるといふ他者基準的価値観を持つているのです。国のレベルでは、自分の国を世界の中心とは考えず、むしろ遅れて劣つたものと見る周辺主義なのです。このことは歴史的、地理的にA理由のないことではありません。日本は太古から、高度に発達した大陸の文明のおこぼれにあずかるという構造になっていて、しかも長期間にわたって異民族に征服されたり迫害されるという経験を持ちません。そこで手放して外国はよい、自分の国はだめだと言いつづけてきたのです。

しかしBこのことはよしあしの問題とはいち

う別の事実です。いや、このような精神の仕組みを日本人が持ち続けたからこそ、今日のようなすばらしい経済発展を遂げることができたと言えま

す。多くの民族が、自分の国はいちばんいい、強いと思つて落ち着いていたために、外国に侵され滅亡していったのです。日本人の絶えざる向上心とは、裏を返せば日本はだめだ、外国はすばらしいという劣等感にほかならないのです。他人に負けまいとする競争心とは、要するに他人のほうが自分よりいいということを認める他者基準の価値観があるからです。

劣等感を捨て、自己に満足するようになると、個人は落ち着き、社会は一時平和になります、やがては沈滞するか強力な外国に征服されてしま

うかのどちらかになります。

このように一つの国の人が、他国の人の質問にどう答えるかという一事を分析してみるだけでも、言葉の使い方は社会や文化の成り立ちと無関係でないことが分かります。

【問題】

- 一、具体的事実として筆者が述べている部分を囲み、その中のまとめ文を見つけなさい。
- 二、線部A「理由」とあるが、ここで述べられている「歴史的、地理的」な理由を説明しなさい。
日本は島国であるという地理的な理由により、歴史的には大陸の文明の恩恵を受ける一方で、長期間にわたって異民族に征服されたり迫害されるという経験がないから。
- 三、線部B「このことはよしあしの問題とはいち

おう別の事実です」とあるが、

①「このこと」とは何をさすか。

「手放して外国はよい、自分の国はだめだと言いつづけてきた」

②筆者は、このことを本当はいいと思つているのか、悪いと思つているのか。理由も説明しなさい。

いいと思つている。「このような精神の仕組みを日本人が持ち続けたからこそ、今日のようなすばらしい経済発展を遂げることができたと言えます」と言っているから。

四、この段を見る限り、筆者の言いたいことはどこに書かれているか。主題文を見つけなさい。 ↓◎部